語源について　　第４回

生活のなかに密着した言葉を中心に、語源のなりたちをあきらかにし、言葉をゆたかにする。　“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。

漢字で書いてあるために、その起りが明らかになることがある。一方、漢字で書いてあるがために、意味はわかっても、起りが隠れてしまうこともある。
ミニクイ、ココロヨイなどを「醜い」「快い」と書くものだから、これらが、「見にくい」「心よい」であることに気がつかないのが普通である。「認める」「見留める」であろう。ココロミルは「試みる」と書くが、実は「心見る」であることを知らない人が少なくない。ウケタマワルは、「承る」と書くのが普通だが、これは「受け給わる」であろう。こういう類は実に多い。

陥る ― 落ち入る　　彩る ― 色取る　　導く ― 道引く
繙紐解く ― 紐解く　　顧る ― 返り見る　　鎖す ― 戸刺す

ムシバム(蝕む)は、「虫」と「はむ」(食う意)との合成語である。ヨミガエル(蘇る)は、「よみ(黄泉)」と「帰る」とが合したもので、死後の世界と言われる「よみ」から「帰る」ことである。コトホグ(寿ぐ)は「言」と「祝ぐ」との合したものである。
＊言祝ぐは、言葉で祝福するという意味：コトババンク参照
カミナリを「雷」とも「稲妻」とも書かれるように、「稲」と「つま」とが合して出来た語である。

- 童心：無邪気な心。「童心」は子供の持っている純真な心。「童心を傷つける」「すっかり童心にかえる」「いつまでも童心を失わない」
- 貫禄：身に備わった威厳。「貫禄がある」「貫禄がつく」「貫禄十分」などと使う。「おもみ」と同じ意である。「年をとると、やはり貫禄がつくものだね」「横綱の貫禄十分」などと言う。「貫」はもと、「ぜに(銭)さし」「つらぬく」などの意があり、転じて、通貨の単位、重量の単位として用いられた。「禄」は「俸禄」「俸給」の意である。
- おかぶ：その人の得意とするもの。「かぶ」と聞くと、今では株式の「株」を連想しがちだが、江戸時代に特定の仲間だけで独占した権利を「株」と言い、またひろく職業上や営業上の特権、専売権を「株」と称した。今でも相撲の社会には「年寄りの株」がある。「おかぶをうばう」あるいは「おかぶが始まった」などと使われる「おかぶ」は、もと、この独占するもの、あるいは特権というような意味から一転して、その得意とするものの意が生まれたものであろう。
- 水くさい：よそよそしい。へだてがましい。情味がうすい。もと、水分が多

くて味のうすいことを言ったものであろう。「僕と君との間だ。水くさいこと言うな」などと使う。

- 羽をのばす：のびのびとする。　鳥が羽をのばす様子から出た言葉であろう。「あすは休みなので、存分に羽根をのばして遊ぶつもりだ」
- かさにかかる：威圧的な態度をとる。　また、優越的な態度で他人にのぞむこと。この場合の「かさ」は物の容積のことである。優勢であるのに乗ずる。「かさにかかって敵を攻め立てる」「かさにかかった、物の言い方をする」
- ぬか喜び：あてはずれの喜び。予想がはずれて、喜んだかいもないこと。「ぬか」は米のぬかのことであるが、「ぬか雨」などのように「少し」の意に使われる。古くは「こぬか喜び」とも言った。「ぬか喜びをさせられた」「心待ちにしていたが、ぬか喜びだった」
- 水かけ論：なかなか結着のつかない議論。もと、田の水かけ争論から出たもので、双方が自分勝手の立場から互いに理屈を言い張って、はてしなく争うこと。「水かけ」は、水を引く意で、わが田に水を引こうと争うことである。「水かけ論をしていてもしようがない」「それは水かけ論だ。やめた方がいい」
- 一目おく：敬意を払う。相手に対して一歩ゆずる。「彼はあなたに一目おいている」などと使う。元来は囲碁用語で、弱い方が最初に一目おいて勝負を始めるからであり、対局をする時一目おくのは、相手を強いものとして敬意を払うことだからであろう。なお、「一目おく」を強めて「一目も二目もおく」という言い方もする。「鼻っぱしらの強いＡも、Ｂには一目も二目もおいている」
- 皮算用：まだ不確定の事に期待をかけること。「とらぬたぬきの皮算用」から出たもの。また、実際の結果がわからないうちから、あれこれと期待をかけて計算することである。「党関係者は、当選者三百名と皮算用をしている」「それは単なる皮算用に過ぎない」などと使う。「皮算用」は言うまでもなく、皮がいくら取れるか、いくらになるかを計算することである。
- 草分け：物事を初めて起したひと。「彼は映画界の草分けだ」などと使う。もと、草深い土地を切り開いて、一つの村や集落などの基礎を作った人のことで、「あそこの家はこの町の草分けですよ」などと言う。
- つつがない：無事である。病気などもしないし、何の異常もないこと。「つつが」はもともと、病気、異常の意という。また、「つつが虫」のこととも言われる。漢字では「恙虫」と書く。「つつが虫」は微小な、ダニの一種の幼生。新潟県・山形県・秋田県などの大きな河の沿岸地帯で、大水の時に冠水する草原や耕地にすむ。昔は日本のもっと広い地帯に住んでいて、その害も多かったのであろう。それで無病息災であることを「つつがなし」という言

葉で表現したのである。さらに転じて「大学をつつがなく卒業した」のように「無事」「別に事もない」の意に使われるようになった。

- 図星：見込んだところ。思うつぼ。急所。「図星をさす」「それは図星だ」のように使う。もともと、矢を射る的の中心の黒点のことである。
- 打算的：勘定だかい。物事をするのにまず自分の利害損失を考えること。何事もそろばんずくであること。「打算的な考え方」「打算的に行動する」のように形容動詞として使う。
- つどい：集まり。元来「つどふ」という古語の動詞の連用形「つどひ」から出たもの「つどい」は今でも「歌と踊りのつどい」「若者のつどい」などのように使う。
- 方便：一つの手段。「うそも方便」「一時の方便として実施した」などと言う。元来は仏教語で、衆生(しゅじょう)を教え導くたくみな手段の意である。「方」は「方法」「方式」などの「方」で、やりかた、てだての意、「便」は、つごう、ついでの意である。
- 御都合主義：定見や計画性のないやり方。その時次第でどうにでもなるようなやり方、はっきりした考えがなく、情勢に応じてふるまうこと。便乗主義「御都合」は言うまでもなく、「都合」の敬語で、「御都合がよかったらお出でください」のように相手のことについて使われるもの。転じて、「あいつは御都合でどうにでも動く」のように使い、「御都合主義」というのが生まれた。

“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。

以上